

## 大英博物館「アッシュルバニパル展 (I am Ashurbanipal: King of the World, King of Assyria)」報告

渡辺 千香子\*

A Summary Report on the British Museum Exhibition “I am Ashurbanipal: King of the World, King of Assyria”

Chikako E. WATANABE

大英博物館（ロンドン）で開催されたアッシュルバニパル展 [I am Ashurbanipal: King of the World, King of Assyria] (2018年11月～2019年2月)は、同館で開催された初めてのアッシリア関連の特別展で、展示品の質・量のみならず、革新的な展示技法が使われた特筆すべき展覧会だった。本稿は、1980年代頃からの大英博物館の変遷と、この特別展の背景と概要について報告する。展示内容は、王アッシュルバニパルの治世を中心としたアッシリア帝国の全容、王家と帝国の首都ニネヴェ、帝国の統治機構と周辺領域、戦闘、帝国の崩壊と伝説、イラクの文化遺産保護活動などから成る。

キーワード：アッシュルバニパル、大英博物館、アッシリア、展覧会

This paper focuses on the British Museum exhibition: “I am Ashurbanipal: King of the World, King of Assyria” opened on 8 November 2018 and lasted until 24 February 2019. It was the first special exhibition held at the British Museum on the theme of the Assyrian Empire. In this paper, the outline of the exhibition is reported according to its original presentation, which was divided into five major sections (Nineveh: a city without rival, Assyria’s world domination, Ashurbanipal at war, The empire falls apart, and Preserving Iraq’s past for the future) with twenty-two subsections.

Keywords: Ashurbanipal, the British Museum, Assyria, exhibition

### 1. はじめに

2019年初頭、日本では大英博物館で開催された「マンガ展」<sup>1)</sup>が連日ニュースに取り上げられ、大きな話題となっていた。一方、その直前に博物館の同じ展示室では、古代メソポタミアの特別展 [I am Ashurbanipal: King of the World, King of Assyria] (2018年11月8日～2019年2月24日)が開催されていた。しかし残念ながら、この展覧会が日本のメディアに取り上げられることはなかった。新アッシリア時代末期の王アッシュルバニパル (Ashurbanipal; 前668～631年頃)に焦点をあてたこの特別展は、展示内容の質・量ともに著しく秀でていただけでなく、展示方法にも革新的な手法が取り入れられ、あらゆる面で特筆すべき展覧会であった。大英博物館が収蔵するメソポタミアの遺物は、イラク国外で最大規模を誇る。中でも、紀元前9～7世紀に栄えた新アッシリア時代の遺跡ニネヴェ (Nineveh) やニムルド (Nimrud) から出土した彫刻作品、そして3万点を超える粘土板文書のコレクションは、今日「アッシリア学」と呼ばれる学問領域が成立するため

に、極めて重要な役割を果たした。

同館が所有するアッシリア浮彫等の収蔵品は、かつて博物館の1階と地下のギャラリーを使って展示されていた。地下ギャラリーには、アッシリア軍がエラム軍と戦った「ティル・トゥーバの戦い (The Battle of Til-Tuba)」やアッシュルバニパル王と王妃が王宮庭園でくつろぐ「(通称) ガーデン・パーティー」を描いた浮彫をはじめ、ニネヴェのイシュタル神殿出土の浮彫など、数多くの重要な作品が置かれていた。大英博物館は今日まで頑なに入館無料の信念を貫いているが、1980年代後半から深刻な資金不足のため博物館警備員の数が大幅に削減され、すべてのギャラリーをオープンにしておくことが困難となった。このため地下のギャラリーが一般公開される機会は次第に減少していったが、ギャラリー内はしばらくの間、展示状態を維持したまま置かれていた。2003年7月に国際アッシリア学会がロンドンで開催された時には、博物館閉館後に地下と1階のギャラリー両方がレセプション会場として使われ、久しぶりに地下にあった数々の収蔵品を見る機会に恵まれた。しかし2006

\*大阪学院大学国際学部

Faculty of International Studies, Osaka Gakuin University

西アジア考古学 第23号 2022年 145-155頁 ©日本西アジア考古学会

年以降、地下ギャラリーは完全に閉鎖となり、貸し出しのためにあちこちの壁面から作品が外されてレンガがむき出しのまま放置されるようになった。特別展から戻った作品が梱包されたまま放置された一画や、建築資材が無造作に置かれて足場の不安定な一画など、地下ギャラリーは最近まで倉庫と変わらない状態で、その中に美術全集等でも必ず紹介されるような彫刻の名品が人目に触れぬまま置かれていた。

## 2. 特別展開催までの流れ

大英博物館関係者の間では、長年にわたって、古代アッシリアのコレクションを中心とする特別展の開催について検討されてきたのだという。しかしそれらは実現されることのないまま、半世紀以上の時が過ぎた。因みに、これまでに企画された大英博物館のアッシリア収蔵品の代表的な展示に「芸術と帝国 (Art and Empire: Treasures from Assyria in the British Museum)」展がある。この展示会は1995年にメトロポリタン美術館で開催されたのを皮切りに、現在に至るまで世界各地を巡回している。日本でも1996年に「大英博物館アッシリア大文明展：芸術と帝国」(朝日新聞社主催)として、山口県立美術館と東京都美術館で開催された。しかしながら、この展示は本拠地ロンドンでは開催されず、あくまでも世界各地を巡回する展示会であった。2001年11月から翌年3月には、大英博物館において「アガサ・クリスティーと考古学：メソポタミアのミステリー」と題する特別展が開催され、ニムルドの遺物が多く展示された<sup>2)</sup>。アガサ・クリスティー (Dame Agatha Mary Clarissa Christie, DBE) は、2番目の夫であった考古学者マックス・マロワン (Sir Max Edgar Lucien Mallowan, CBE) のニムルド調査等に同行し、『メソポタミア殺人事件』をはじめとする代表的な作品をイラクで執筆した。2017年10月から翌年3月にかけては、ニネヴェに関する展示「ニネヴェ：古代帝国の中心 (Nineveh - Heart of an Ancient Empire)」がオランダのライデンで開催され<sup>3)</sup>、大英博物館の収蔵品も多数展示されたが、ロンドンでの開催はなかった。したがって、2018年のアッシュルバニパル展は、大英博物館で開催されたアッシリアの特別展としては初めての企画だったといえる。

この特別展の開催が内々で決定されたのは2017年7月、展示会の開催期間は2018年11月8日～2019年2月24日とされ、準備期間は15カ月を切るという急転直下の決定だった。展示会の企画・準備は、学芸員のG.ブレアトン (Gareth Brereton) 氏が担った。同氏の専門分野は、西アジアの新石器時代から都市文化移行期における埋葬儀礼と富の集積に関する研究

で、必ずしも紀元前1千年紀の新アッシリア時代は得意とする分野ではなかった。しかし、わずかな期間に関連する文献を精読し、展示会の全体構想ならびに展示物の調整からカタログ編集までのすべてを同氏が一手に担った。筆者はちょうど2017年からアッシリア浮彫の石材分析に関わる研究プロジェクト<sup>4)</sup>を開始し、特別展開催までの準備期間中も2～3カ月おきに同館の地下と1階のギャラリーで調査をさせてもらった。そのため、アッシュルバニパル展の準備が進む様子をつぶさに目の当たりにする機会に恵まれた。またこの特別展にあわせて、これまで常に貸し出し中か梱包されたままだった特定の収蔵品が一時的に梱包を解かれて、特別展のために待機した状態に遭遇し、千載一遇の調査機会に恵まれた。とはいえ、筆者たちが調査を行う間は必ず博物館の関係者が付き添う必要があった。分析用の携帯型X線分析装置は僅かな放射線を照射するため、不注意に人が近づかないよう「危険！被爆注意」の札を掲げ、少し離れた場所に陣取り、本来はデスクで行うべき特別展カタログ (Brereton ed. 2018) の仕事を寒くて薄暗い地下の一画で背を丸めて行う姿に、たいへん申し訳ない思いだった<sup>5)</sup>。

## 3. 特別展の概要

特別展の会場には、1階 (Ground floor) 第30室の「セインズベリー展示ギャラリー (Sainsbury Exhibitions Gallery)」<sup>6)</sup> という1辺が70mもある新しい大広間が使われた。この部屋はグレイト・コート脇のエジプト・ギャラリーの奥側に位置しており、以前は入館者が目にする機会のない空間であった。特別展用ギャラリーの工事は2013年に着工され、1億3500万ポンドの費用をかけて半年間かけて完成し、2014年のヴァイキング展開催がこけら落としとなった<sup>7)</sup>。この事業のために、セインズベリー家から2500万ポンドの寄付を受けたため、ギャラリーに「セインズベリー」の名前がついたという。これまでここで開催された多くの特別展は、大広間のスペースの割に展示作品数が少なく、いつもスカスカの印象があった。しかし、アッシュルバニパル展はこの広大な空間を余すところなく使い、逆にスペースが足りない程の充実度で、数多くの作品やパネルが所狭しと陳列された。

展示室全体の照明は極限まで落とされ、一つひとつの作品がスポットライトに照らし出されて浮かび上がる演出がとられた。入場者は現代の日常から一気に2600年以上昔の古代世界へ迷い込むような錯覚の中、作品と向き合いながらテーマに沿って展示をたどる。会場入口には、実際の風景を目前にするとく、ティグリス河が流れるニネヴェ周辺の風景を映し出し



図1 (左) 会場入口のパノラマ風景パネル、(右) メイン会場への入口に置かれた一対の守護像浮彫、ニネヴェ北宮殿 B 室 a 扉出土 (前 645~640 年頃)。大英博物館収蔵 (筆者撮影)

た大型のパネルが設置され、紀元前 669 年にアッシュルバニパルが即位した時代のアッシリアについて説明された (図 1 左)。パノラマ状に広がる風景に続いて、この展示を象徴するように王のライオン狩り浮彫 (北宮殿 S 室出土) が、王の肩書「アッシュルバニパル、偉大な王、強い王、世界の王、アッシリアの王 (I am Ashurbanipal, great king, mighty king, king of the world, king of Assyria)」の下に浮かび上がり、劇場的効果が遺憾なく発揮された。この 3 段構成のライオン狩り浮彫は、通常、博物館 1 階のアッシリア・ギャラリーに常設展として置かれていたが、この展示のために一部分が壁から外されて、アッシュルバニパル展の特別な位置を占めることとなった。展示は大きく 5 つのセクションと 22 のサブ・セクションに分けられていた。以下、展示の順路を辿る形でセクションの表題に沿いながら、展示の概要を報告する。

### (1) 比類なき都市ニネヴェ

#### (Nineveh, a city without rival)

アッシュルバニパルの祖父センナケリブ (Sennacherib; 前 705~681 年) は、新都ニネヴェに南西宮殿を建立し、そのスケールと壮麗さから「比類なき宮殿」と称されて、当時の人々を驚嘆させた。アッシュルバニパルは自ら着工した北宮殿が完成するまで、祖父が建てた南西宮殿で執務を行った。このコーナーには、センナケリブがニネヴェを新都として造成した記録を記した粘土製ブリズム、ならびにニネヴェに建立されたセンナケリブの宮殿ファサードを描いたと考えられる浮彫が並べて展示された。展示会場内部へ進む導入部分にあたる空間には、古代の宮殿の通路を模して、通路の左右に 3 体ずつの守護像浮彫が向かい合って設置された (図 1 右)。この浮彫は北宮

殿 B 室から P 室に至る通路から出土し、守護精霊はラフム (*lahmu*)、ウガル (*ugallu*)、「家の神」(House God) から成る。

### ①王族 (The royal family)

サルゴン 2 世 (Sargon II; 前 722~705 年) に始まり、センナケリブ、エサルハドン (Esarhaddon; 前 681~669 年)、アッシュルバニパルに至る王家の系図、そしてエサルハドンがアッシュルバニパルを王位継承者とした一方、兄のシャマシュ・シュム・ウキン (Shamash-shum-ukin; 前 668~648 年) をバビロニア王としたことが説明される。アッシュルバニパルの王妃リバリ・シャラト (Libbali-sharrat) の浮彫 (ベルリン国立博物館蔵) やアッシュルバニパル祖母ナキア (Naqi'a) が息子エサルハドンの後ろに立つ姿で表現される青銅製浮彫 (ルーブル美術館蔵) も展示された。

### ②アッシュルバニパルのニネヴェの宮殿

#### (Ashurbanipal's palace in Nineveh)

アッシュルバニパルが建立した北宮殿には、建築資材として、泥レンガや彩釉レンガ、白く輝くしっくいその他、梁にはレバノン杉等の木材、広間の内装には数多くの浮彫が使われた。浮彫には彩色が施され、現在もその一部に顔料の痕跡が確認される。宮殿の外装、内装として使われた遺物の展示では、ロータスやロゼット、花狭間文様が彫り込まれた「石製カーペット」、宮殿の通路等に置かれていたセベッティ (*sebetti/sebitti/sibitti*: 七神) やウガル、ウルマフルル (*urmahlullu*) 等の守護精霊の浮彫などが出品された。宮殿の調度品として、象牙細工の施された椅子の背もたれや、壁面に設置された装飾額、ガラス

器や微化石の含まれた石製ライオン型容器など、当時の宮廷生活が偲ばれるものが並んだ。

この特別展を特徴づけるユニークな展示方法として、浮彫彫刻の実物の上にプロジェクションマッピングのように精巧な「光」を投影する手法がある。この技術により、浮彫の彩色を復元したり、作品上にじかに解説を投影したり、また描かれているモチーフを観る者にわかりやすく説明することが可能となる。例えば、3体のセベッティが描かれた浮彫には、プロジェクターから赤・青・白色の光が投射され、彩色が施された当時の状態を復元して見せる(図2)。S. ダリー (Stephanie Dalley) の「空中庭園」の研究(Dalley 1994)で脚光を浴びた水道橋やパピリオンが描かれた浮彫には、緑・青・白・赤・茶色の光を照射する手法がとられた(図3)。浮彫の右上部分から、高台に茂る樹木の間を、水道橋によって運ばれた水が高所から流れ落ちる青い流れが動画で示された。必ずしもオリジナルの彩色を復元したとは限らないが、構図が込み入っているため、彩色のない浮彫図を見ても

一般の人には何が描かれているのかを理解することが難しい。光を使ったこの演出は、描かれたモチーフの一つひとつを観る者に視覚的に理解させるうえで実に効果的であった。

### ③学者としての王 (The scholar king)

アッシュルバニパルは、常に尖筆を腰のベルトにはさんだ姿で表現され、文字の読み書きができることを誇りとしていた。父王エサルハドンは、息子が優れた書記(占星術師)バラシ(Balasi)から教育を受けるようはからい、アッシュルバニパルも自らの識字や学識の豊かさを自慢した。王は複雑な数学の割り算や掛け算ができ、また難しいシュメール語やアッカド語の文書を読めることを、自慢げに王碑文に記載させた。展示では、アッシュルバニパルが13歳の時に練習用に記した父王宛の書簡、ならびに教師が書いたお手本の書簡が並べて展示され、展示の解説に「王の書いた書簡はどちらかわかりますか?」とクイズ形式で問われている。アッシュルバニパルは父王から継承した文



図2 3体のセベッティを描いた浮彫に投影される光。ニネヴェ北宮殿中庭O出土(前645~640年頃)。大英博物館収蔵(筆者撮影)

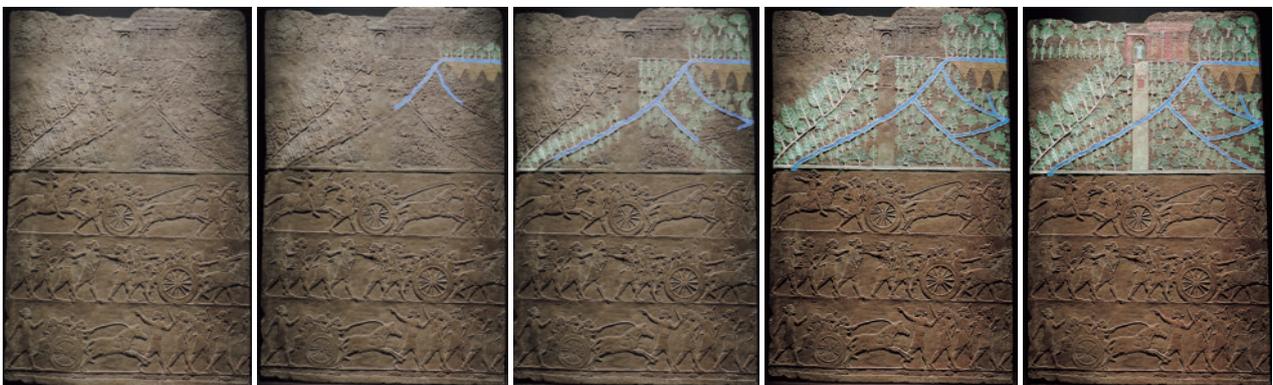


図3 水道橋で引かれた水が高所から流れ落ちて庭園を潤す情景。ニネヴェ北宮殿H室出土(前645~640年頃)。写真は、左から右へ時間が経過するとともに全体のモチーフが塗り分けられていくプロジェクションマッピング映写を示す。大英博物館収蔵(筆者撮影)

書コレクションをさらに拡充し、「アッシュルバニパルの図書館」として知られる大規模な文書庫を形成するに至った。

#### ④王となるための訓練 (Training to be king)

アッシュルバニパルが王位継承者として正式に指名されると、住居を「王位継承の家 (*bit redūti*)」へ移し、王に相応しいリーダーシップや武術の訓練、学問を学んだ。諜報機関の長として密かに父王の執政を助け、広大な帝国の各地から収集した情報をまとめて報告する役を担ったとされる。ここには、王がライオンを一对一で仕留める場面や、狩猟後の儀式の場面を含む浮彫（北宮殿 S<sup>1</sup> 室出土）のほか、王宮庭園のライオンを描いた浮彫等が展示された。

#### ⑤知識は力なり (Knowledge is power)

アッシュルバニパルが所有した文書は1万点を下らない。それぞれの粘土板には上等な生地土が使われ、筆跡鮮やかに記された。王は「文書庫」や「図書館」を通じて「知」の集積にアクセスすることができた。その内容は、神々の意思を知るための技術を記した卜占や予言、祭儀、暦、讃歌、祈祷書、呪術、医術など広範にわたり、文書の奥書には王の名前が記された。会場中央には、ゆうに5mを超えるケースが天井近くまでそびえ立ち、サイズや形態によって分けられた粘土板を一望できる斬新なアイデアの展示が置かれた（図4）。リラを奏でる楽師や神官を描いたイシュタル神殿出土の浮彫、王宮で使われたボードゲーム等も展示された。

## (2) アッシリアの世界統治

### (Assyria's world domination)

このセクションは、アッシュルバニパルが即位した当時の帝国の支配領域と統治機構、経済組織等に光をあてた。アッシュルバニパルが即位した時、アッシリアの勢力範囲は地中海東部沿岸地域からイラン西部の山岳地帯に及び、領土は州に組織され、各州は王が任命した知事によって管理された。アッシリアには富が集められ、征服された土地から強制的に大勢の人々が新たな土地に植民させられた。物資や人々の移動により、新たな言語や芸術様式、技術等がもたらされた。

#### ⑥即位 (Coronation)

エサルハドンには多くの子供がおり、アッシュルバニパルには少なくとも8人の兄弟がいた。長男ではなかったアッシュルバニパルが王位継承者に任命された時、エサルハドンは帝国の主要な統治者たちを召集して王位継承を定めた協定の締結式に立ち合わせ、その支持を取り付けた。3年後にエサルハドンが急逝する

と、取り決め通りに王位継承が遂行され、アッシュルバニパルが即位した。当時まだ強い権力を持っていた祖母のナキアは、アッシリア全土に新王への忠誠を誓わせることで王位継承を保護した。

#### ⑦王の道 (King's Road)

アッシリア帝国は広大で統治が容易でなかったため、効率のよい安定したネットワークが帝国統一の鍵を握った。迅速な情報伝達のため、帝国内は「王の道」によって結ばれ、いかなる連絡も首都までほんの数日で伝達されるよう整備された革新的なシステムであった。王の信頼を得た高官から成る閣僚たちは、認印を兼ねた黄金製の指輪を身につけ、この印章が押された書簡は王の権限を表した。このように王の権限を委任する制度により、王は同時に複数の場で権力を行使することが可能となった。

#### ⑧バビロニア (Babylonia)

アッシリアは長い伝統と歴史を有するバビロニアと特別な関係を維持した。アッシュルバニパルの祖父センナケリブは、自らの長男をバビロニア王として送り込んだが、バビロニア人の裏切りで息子は拘束され、アッシリアの政敵であるエラムに引き渡されてしまった。そのためセンナケリブはバビロンを破壊し、バビロンの主神マルドゥク (Marduk) の神像を持ち去る報復を行なった。

#### ⑨アラム王国 (Aramaean kingdoms)

歴代のアッシリア王たちは、アラム王国の文化や伝統の影響を受けた。前1200年頃、ヒッタイト帝国の滅亡に続き、シリア北部やトルコ南東部に小さな王国が興った。その中には、アラム語 (Aramaic) を話すシリア系の王国やヒッタイトとのつながりを継承した王国もあった。後者はヒッタイトの宗教を信仰し、ヒッタイト語に近い象形文字を使ったルウィ語 (Luwian) を使う王国だった。前700年頃までに、これらの小王国はアッシリア帝国に併合され、征服された人々はアッシリア領土の各地に強制移住させられたため、アッシリア帝国では広くアラム語が話されることとなった。

#### ⑩南レヴァント (The southern Levant)

南レヴァントの王国は、この地域の海上ならびに陸上貿易のルートを支配し、アッシリアはこの豊かな統治者たちから貢納品として物資や資源を搾取した。アッシリアの要求を満たすため、フェニキア人 (Phoenicians) たちは地中海全域に乗り出し、沿岸に築かれた都市は、贅沢品の産出や買い取りを行う港湾となった。アッシリアに課された重税を支払うこと



図4 アッシュルバニパルの文書庫出土の粘土板の展示風景（筆者撮影）。（上）全景、（下）拡大

ができないとアッシリア軍に攻撃・略奪され、住民は別の土地へ強制移住させられた。イスラエル王国をはじめ、アッシリアに反乱を起こした地域は征服され、アッシリアの領土へ組み込まれた。ユダ王国やペリシテ人 (Philistines) の国々はアッシリアの専制的支配に服したが、属領とはならなかった。

#### ⑪キプロスの王国 (The kingdoms of Cyprus)

キプロスには地中海貿易に従事するいくつかの王国があり、アッシリアやレヴァントとの交易を通じて豊かに繁栄した。フェニキア系の入植者たちはキプロス島の銅の貿易を独占し、キプロスの王族を従属させていた。この地で反乱が生じると、フェニキア人はアッシリアに援助を依頼し、キプロスの王族はアッシリアの武力に降伏して、アッシリアへの忠誠を誓わされた。アッシリアとキプロスの関係は、エサルハドンとアッシュルバニパルの代に発展した。キプロスの統治者たちはニネヴェの改修工事を助け、アッシリア軍の移動のために船を提供した。アッシリア帝国の交易ネットワークに関与することでキプロスは富を蓄え、国際色豊かな文化を発展させた。

#### ⑫ウラルトゥ王国 (The kingdom of Urartu)

アッシリアの北に位置する山岳地帯を支配したウラルトゥ王国は、北部山岳地帯にある要塞のネットワークを支配し、アッシリア帝国の手ごわいライバルであった。前700年頃に膠着状態が生じるまで、両者は国境付近で何度も武力衝突した。アッシュルバニパルの治世には、ウラルトゥ王国は遊牧騎馬民族の攻撃によって弱体化した。現在までに知られている王国最後の統治者については、アッシュルバニパルに貢納品を贈った記録が残されている。

#### ⑬イラン西部 (Western Iran)

ザグロス山脈の山稜地帯で生まれた馬を入手するために、アッシリアはイラン北西部のマンナイ王国 (The kingdom of Mannea) と同盟関係を結んだが、ウラルトゥ王国とアッシリアの敵対関係における最前線となり、一旦は誓った忠誠を反故にしたことから、両者の関係が緊張した。馬の確保と供給は軍隊の維持に欠かせないため、アッシリアはより南方の地域に目を向けることとなり、かつてメディア (Medes) に支配されていた領域は、アッシリアがザグロス山脈の峡谷を抜ける交易路にアクセスするための属州と化した。アッシュルバニパルの父エサルハドンは王一族のボディガードにメディア人を雇っていた。

#### ⑭エラム (Elam)

イラン南西部の平原と山地に広がるエラム王国は、

アッシリアの南方への勢力拡大に慎重に対処しつつも、1世紀以上にわたってアッシリアへの服従を拒み通していた。そしてアッシリアに対する反乱勢力を援助し、アッシリアの政敵をかくまった。アッシュルバニパルの治世初期は、エラム王国と友好的な関係を保っていたが、エラムがバビロニアに侵攻してからは大きな懸念のもととなった。以後、アッシュルバニパルはエラム問題に多大な時間を費やすこととなる。

#### (3) アッシュルバニパルの戦争 (Ashurbanipal at war)

このセクションは、アッシュルバニパルの治世に生じた主要な戦闘のテーマを扱う。アッシリアにとって戦争は秩序を作る手段であり、アッシュルバニパルは多くの軍事遠征を決断することとなった。神の代理人として帝国の支配領域を拡大し、世界に「秩序」をもたらすことが王の責務と考えられた。したがって、アッシリアの王や神々をなおざりにした者に対して暴力を行使することが正当化された。アッシュルバニパルの治世前半、帝国は繁栄し、領土も拡大した。西はエジプトから東はエラム王国まで、アッシリアは容赦なく敵を制圧した。しかしながら治世中頃になると、バビロンで深刻な問題が生じ、やがては兄弟間の闘争に至るようになる。

#### ⑮アッシュルバニパルのエジプト征服 (Ashurbanipal conquers Egypt)

エジプトは長年にわたってアッシリア帝国の西側国境付近を脅かし続けてきたため、前671年にエサルハドンは軍事遠征を行い、エジプトへ侵攻した。その2年後、追放されていたエジプト王タハルカ (Taharqa/Taharka/Taharqo) が舞い戻って支配権を奪取したため、エサルハドンは再び制圧に向かったが、その途上で病に倒れ、急逝した。急遽、即位したアッシュルバニパルは、エジプトへ遠征軍を送り反乱を制圧したが、タハルカは逃亡する。やがてタハルカの甥が、自らをエジプト王と宣言するに至り、アッシリアは再び軍事遠征を行うことになる。この時の遠征で、エジプトの古都テーベ (Thebes) を陥落させて住民を連行し、数知れない戦利品を略奪した。それらの戦利品はニネヴェの凱旋パレードで披露されたほか、テーベの神殿塔門を飾っていた金属製オベリスクが、アッシリア神殿の新たな装飾のために铸造し直された。展示では、北宮殿「玉座の間」から出土したエジプト遠征の浮彫 (北宮殿 M 室出土) が出品された。

#### ⑯東部における紛争 (Trouble in the east)

アッシュルバニパルの治世初め、エラム王国との関係は良好だった。しかしアッシリアがエジプト遠征に

従事していた隙をついて、エラム王ウルタク (Urtak) がバビロニアに侵攻したため、関係が緊張する。バビロニアからエラム勢力を排除するため、すぐにアッシリア軍が派遣され、ウルタクは同年没する。エラム王国の王位は、正統な継承者のウンマニガシュ (Ummanigash) からウルタクの兄弟テウンマン (Teumman) に強奪され、ウンマニガシュは家族を連れてアッシリアへ亡命する。テウンマンはアッシリアにウンマニガシュの引き渡しを要求したが、アッシュルバニパルはこれを拒否した。アッシリアの史料は、テウンマンがこの一件を根拠にアッシリアを攻撃したと主張し、アッシリア軍がエラムへ派遣された。ウライ河 (the Uлай river) の河岸でアッシリア対エラムの白兵戦が展開し、エラム王テウンマンは捕えられ、戦場でアッシリアの一兵士によって斬首された。テウンマンの首はアッシリアに送られ、その後ニネヴェとエルビル (Erbil) でさらし首にされた (図5)。

ウライ河ほとりのティル・トゥーバを舞台に展開したこの戦闘は、高さ2mに及ぶ大型の石製浮彫に表現され、センナケリブが建立したニネヴェ南西宮殿第33室から出土した。浮彫に使われた石材は、ニネヴェの南西宮殿や北宮殿を装飾した一般的な石板 (石膏岩) と異なり、多数の微化石を含む特殊な石灰岩で、前698~697年の軍事遠征でセンナケリブがニブル山 (Mount Nipur; トルコ南東部、現在のジェ

ディ・ダー [Mount Judi]) から持ち帰った「ペンドウー石」(NA<sub>4</sub>.dŠE.TIR: *pendû*) だと考えられている (Mitchell and Middleton 2002: 95-96)。

また、この浮彫の構図には、高度な異時同図の技法が使われている。敗走したエラム王がアッシリア軍に捕まり、戦場で斬首され、その頭部がアッシリアに向けて輸送されるまでの一連のエピソードが、パノラマ的に展開する大画面の戦闘情景の中に組み込まれて表現される。古代エジプトのラムセス2世 (Ramses/Ramesses II; 前1279~1213年) の「カデシュの戦い」(The Battle of Kadesh) に影響を受けた画面構成だとする研究もあるが (Kaelin 1999)、異時同図の表現様式をより詳しく分析すると、カデシュの戦いに使われた構図は「詰め込む様式」の原理に基づき、ティル・トゥーバの戦いの構図は「連続する様式」の原理に基づくことが判明した (渡辺 2006)。大英博物館の今回の展示では、筆者の研究 (Watanabe 2004) に沿って、エピソードの展開がわかるようモチーフを特殊な光の照射で浮かび上がらせ、近くの壁面に照射された簡単な解説文とともに、場面ごとに生じた出来事について順を追って説明する手法がとられた (図6)。精巧で繊細な光の投影によって、複雑な内容をわかりやすく辿れるようにした、極めて高精度の技術が使われた展示であった。



図5 浮彫「ティル・トゥーバ (ウライ河) の戦い」の展示情景、ニネヴェ南西宮殿第33室出土 (前660~650年頃)。大英博物館収蔵 (筆者撮影)



図6 光の投影でモチーフを浮かび上がらせた「ティル・トゥーバ（ウライ河）の戦い」浮彫の展示情景、ニネヴェ南西宮殿第33室出土（前660～650年頃）。大英博物館収蔵（筆者撮影）

### ⑰兄弟間の争い (Sibling rivalry)

アッシュルバニパルがアッシリアの王として全土を統治したのに対し、兄のシャマシュ・シュム・ウキンはバビロニアの統治を担った。弟であるアッシリア王からの度重なる干渉に業を煮やしたシャマシュ・シュム・ウキンは、ひそかに反アッシリア連合を組織した。この陰謀が露呈したとき、アッシュルバニパルはバビロニア人を説得して戦争を避けようとしたが、失敗に終わる。両者が戦火を交えることになった時、アッシリア軍はバビロンを包囲し、兵糧攻めにした。このためバビロニアの人々は、シャマシュ・シュム・ウキンが焼死という非業の最期を遂げるまでの2年間、極度の飢えと病気に苦しむこととなった。

### ⑱報復 (Retaliation)

バビロンの反乱制圧後、アッシュルバニパルは兄の企みに関わった支持者たちに報復を加えた。中でも、裏切り者のバビロニア知事をかくまったエラムに対する怒りは強く、知事を引き渡さないと王国を壊滅させると警告した。この脅しにエラムが服従しなかったため、アッシリアはエラムの首都スサ (Susa) を攻撃して神殿を破壊し、歴代の王族の遺骨を墓から略奪した。自らの拘束が差し迫ったことを悟ったバビロニア知事は、護衛の者に自分を殺させ、遺体を塩漬けにしてニネヴェのアッシュルバニパルのもとに届けさせた。

### ⑲秩序の回復 (Order restored)

アッシュルバニパルは、敵を情け容赦なく制圧することによりアッシリア王としての務めを果たし、世界の秩序を回復した。数々の偉業は、王が建立した北宮殿の壁面を飾る浮彫に記録された。エラム征服の出来事は、王と王妃が王宮庭園でくつろぐ姿を描いた通称「ガーデン・パーティー」として知られる浮彫の一場面を象徴される。アッシュルバニパルは長椅子に身をゆだね、王妃リバリ・シャラトは王と向き合って王妃の玉座に座している。青々とした松やナツメヤシ、ブ

ドウの木が茂って背景をなす庭園の中、王の視線は木の枝にかけられたエラム王の首に向けられ、秩序回復のために戦った戦闘を象徴的に表す記録となっている。

### (4) 帝国の崩壊 (The empire falls apart)

前631年頃、アッシュルバニパルが没すると、間もなくアッシリア帝国の崩壊が始まる。バビロンでは前626年に軍司令官ナボポラッサル (Nabopolassar) が王位に就き、この地域一帯は混沌とした内戦状態に陥った。優位に立ったナボポラッサルの軍隊はアッシリアへ進軍し、アッシリアは帝国の存続がかかった戦争に突入する。キヤクサレス (Cyaxares) 率いるイランのメディア軍は、この混乱に便乗して古都アッシュル (Ashur) を襲撃し、アッシリアの王墓を略奪して石棺を壊して、中にあった王たちの遺骨を破壊した。前612年には、ナボポラッサルとキヤクサレスが同盟関係を結んでニネヴェを攻撃し、この戦闘で偉大な都市ニネヴェは陥落し、焼失する。アッシュルバニパルの息子シン・シャル・イシュクン (Sin-shar-ishkun) も非業の死を遂げる。

### ⑳アッシュルバニパルの運命 (Ashurbanipal's fate)

アッシュルバニパルの治世は長期にわたったが、その末期について詳しいことは知られていない。現存する最後の記録は前638年であり、アッシュルバニパルの退位は前631～627年の間と考えられている。王の死に関する記録がないため、王が治世の終わりに死去したか、自ら退位したか、あるいは退位を強いられたのかさえもわからない。王の死後、おそらく歴代の王たちが眠るアッシュルの王墓に葬られたと考えられる。その後、アッシリアの王位は、アッシュル・エテル・イラニ (Ashur-etel-ilani)、そしてシン・シャル・イシュクンによって継承されたが、いずれも短命に終わった。前626年には軍司令官だったナボポラッサルがバビロンで王位に就き、アッシリアから独立す

るための戦争を始めた。

#### ⑩伝説・発見・復活

##### (Legend, discovery and revival)

聖書や古代ギリシャ・ローマの文学において、アッシリアの没落は、富や財宝に囲まれ墮落したアッシリア王に下された天罰と語られてきた。そこでは、王の放蕩が帝国の崩壊をもたらし、最期は薪をうずたかく積み上げて火を放ち、宮殿の財産、妾、宦官たちとともに焼死したと伝えられてきた。しかし1840年代からの考古学的発見によって、長年にわたるアッシリアの悪しきイメージが塗り変えられ、アッシリアは古代世界における最も偉大な文明の一つであったことが明らかになった。

#### (5) イラクの未来へ向けた過去の保存

##### (Preserving Iraq's past for the future)

近年の政治紛争の中で、イラクの豊かな文化遺産は武装勢力の標的とされ、意図的に破壊されることが続いた。イラク政府は国際組織と共同で、自国の文化遺産の保護と再建に取り組んでいる。イラクでは1840年代に始まるアッシリアの遺跡発見以来、重要な考古調査が継続されてきた。湾岸戦争(1990~91年)ならびにイラク戦争(2003~11年)の間、イラクの文化遺産は軍事作戦や経済制裁、盗掘や破壊行為によって大きなダメージを受けた。2014~17年には、イラクとシリアの文化遺産が、通称「イスラム国」(Islamic State/ISIS/ISIL)と呼ばれる過激派組織のプロパガンダの標的となり、アッシリアの都であったニムルドやニネヴェをはじめとして、かつてない規模で組織的な文化財の破壊行為が横行した。イラクの文化遺産は、イラクの人々にとって重要なだけでなく、人類の歴史を理解する上でもかけがえのないものである。大英博物館は、イラク考古総局とともにイラクの文化遺産を現在と未来の世代に伝えるため、その復興に尽力している。展示では、大英博物館のイラク文化遺産保護に関する具体的な取り組みについて、パネルを使って説明された。中でも2015年に大英博物館が立ち上げた「イラク・スキーム (the Iraq scheme)」は、イラク人研究者をロンドンに招聘して研修を行なう活動、ならびにイラク現地の遺跡における調査活動、の二つの柱から成る。大英博物館学芸員のS.レイ氏 (Sebastien Rey) はイラク南部の遺跡ギルス (Girsu/Tello) における調査を指揮し、J. マグギニス氏 (John MacGinnis) はイラク北部クルド自治区の遺跡ダルバンディ・ラニヤ (Darband-i Rania in Iraqi Kurdistan) における調査を担当する。両氏はロンドンにおけるイラク人研究者の研修の際も責任者として指導にあたる。

#### ⑫図書館 (文書庫) の第二の人生

##### (A second life for the library)

1850年代、アッシュルバニパルの宮殿跡から、はじめて多数の粘土板文書が発見された。何千枚にも及ぶ保存状態のよい粘土板文書の見つけは、アッシリア学にとって実に幸運なことであった。ここで発見された粘土板は、私たちが今日理解しているアッシリアについての核心的な知識を提供することとなった。しかし、当時の発掘は、学問としての厳格な調査方法が確立される前であったことから、粘土板の出土状況に関して残念ながら詳しい記録は残されていない。現在の基準に沿った考古調査が行われていたならば、文書庫のたどった運命についてより詳しいことが明らかになったと考えられる。アッシリア学の文献学者たちは、これまで数多くの粘土板文書の断片一つひとつについて忍耐強く調査を重ね、オリジナルの文書を復元すべく努めてきた。大英博物館では、現在、これらすべての文書をデジタル化することにより、文書の起源や役割を明らかにする研究に取り組んでいる。

#### 4. 終わりに

アッシュルバニパル展が開催された翌年2020年初頭から、世界は新型コロナ感染によるパンデミックの渦中へと突入した。英国でも数多くの感染者と犠牲者が出て、ロンドンのロックダウンにより、長い期間にわたって大英博物館も閉館されたままであった。イラク現地でも感染が拡大し、2020年はイラク・スキームの活動も停止に追い込まれた。そのような中、筆者は大英博物館学芸員のG.ブレアトン氏とJ.テイラー氏 (Jonathan Taylor) にオンライン形式での講演を依頼し、2021年3月19日に「ニネヴェの展示 (Displaying Nineveh)」というタイトルのワークショップで、「最も偉大な王アッシュルバニパルの展示 (The greatest king you've never heard of: exhibiting Ashurbanipal at the British Museum)」(ブレアトン) ならびに「世界の王アッシュルバニパルの文書庫 (The library of Ashurbanipal, king of the world)」(テイラー) の講演会を開催した。この催しは筆者が代表を務める科研(「アッシリア浮彫の石材分析から挑む産地同定と復元」17H04493)、ならびに筑波大学新学術領域研究「都市文明の本質」(領域代表者: 山田重郎) の共催で実現した。2021年10月現在、イラク・スキームの活動がようやく再開され、レイ氏率いる調査隊がギルス現地における考古調査を再開しているとの朗報が入った。コロナ禍が続く困難な状況の中で現地における調査活動再開は、私たちにとって希望の光であり、深い感銘とともにこの知らせを受けとめた。

ブレアトン氏が編集したアッシュルバニパル展の解説は、アッシュルバニパル王の治世を中心に、様々な観点から新アッシリア時代末期の様相を総観した、極めて学術性の高い内容となっている。しかし意外にもそれらは展覧会カタログに含まれていない。そればかりか、展覧会後も大英博物館のウェブサイトで公開されることもなく、展覧会開催中に会場内パネルで展示されただけで、忘れ去られようとしている。日本では、アッシュルバニパルのライオン狩り浮彫やニネヴェの文書庫(図書館)については広く知られながらも、王の人物像やアッシュルバニパルが統治した時代背景については余り知られていない。また、同王の治世に関する論文等は多少ある一方、王の人物像や時代背景を詳しく解説した出版物は、筆者の知る限りまだない。本論の「3. 特別展の概要」は、展示で使われた解説文を筆者が翻訳し、それを土台に適宜情報を補足したものである。アッシュルバニパル展開催中に現地で展示を見学できた人も非常に少ない現状に照らし、ブレアトン氏はじめとする大英博物館中東部門の学芸員たちがまとめた展示解説について、ここに記録として紹介する意義があると考えた次第である。

#### 謝辞

本稿を書くにあたり、ギャレス・ブレアトン博士からアッシュルバニパル展に使用された展示用解説の原文をご提供いただいた。ここに記して深く感謝の意を表したい。

#### 註

- 1) 「The Citi Exhibition Manga」(2019年5~8月)。
- 2) この展示に合わせて当初2001年11月に大英博物館においてニムルド学会が予定されたが、同年9月に起きたニューヨークでの同時多発テロ事件の影響で、会議は翌年3月に延期された。

- 3) The Dutch National Museum of Antiquities in Leiden (20 October 2017~25 March 2018)。
- 4) JSPS 科研費「アッシリア浮彫の石材分析から挑む産地同定と復元」(17H04493)。
- 5) 学芸員のギャレス・ブレアトン博士、ジョナサン・テイラー博士 (Dr Jonathan Taylor)、ベネディクト・リー氏 (Mr Benedict Leigh)、ならびにジョン・マッギニス博士 (Dr John MacGinnis) とセバスチャン・レイ博士 (Dr Sébastien Rey) にお世話になった。ここに記して感謝の意を表したい。
- 6) 大英博物館の平面プランについては以下を参照 (<https://www.britishmuseum.org/visit/museum-map>)。
- 7) イブニング・スタンダード紙2013年4月29日記事 (<https://www.standard.co.uk/news/london/making-history-the-ps135m-gallery-set-to-transform-the-british-museum-8594482.html>)。

#### 参考文献

- Brereton, G. (ed.) 2018 *I am Ashurbanipal: King of the World, King of Assyria*. London, The Trustees of the British Museum/Thames & Hudson.
- Dalley, S. 1994 Nineveh, Babylon and the Hanging Gardens: Cuneiform and Classical Sources Reconciled. *Iraq* 56: 45-58.
- Kaelin, O. 1999 *Ein assyrisches Bildexperiment nach ägyptischem Vorbild: zu Planung und Ausführung der "Schlacht am Ulai."* Darmstadt, Ugarit-Verlag.
- Mitchell, T. C. and A. P. Middleton 2002 The Stones Used in the Assyrian Sculptures. *Journal of Cuneiform Studies* 54: 93-98.
- Watanabe, C. E. 2004 The 'Continuous Style' in the Narrative Scheme of Assurbanipal's Reliefs. *Iraq* 66: 103-114.
- 渡辺千香子 2006「新アッシリア時代の浮彫り《ティル・トゥーバの戦い》におけるエジプト美術影響説の検討」『西南アジア研究』65号 1-20頁。

